教育最前線 連載40

●Hondaの新高齢歩行者プログラム

高齢者に道路横断中の事故の特徴と安全な道路の渡り方を理解してもらう

ホンダは昨年11月、高齢歩行者向けの新たな教育プログラム「新高齢歩行者プログラム」（以下、プログラム）を開発した。このプログラムは、道路横断中の事故を防ぐための安全行動を高齢者に理解してもらうことを目的としており、ホンダは地域の交通安全指導者を通じて、その普及拡大を図っている。高齢歩行者においては道路横断中に事故に遭うケースが多いことから、映像を使って道路横断中における歩行者、ドライバーそれぞれの視点から観た疑似体験ができる内容を取り入れるなど、意識と行動のミスマッチを高齢者に気づいてもらえるようになっているのが特徴である。

（一財）岡山県交通安全協会 水島交通安全協会シルバーセーフティサポーターの虫上陽子さんがHondaの高齢歩行者教育プログラムを活用して高齢者140名に歩行中の事故防止のポイントを解説

（一財）岡山県交通安全協会 水島交通安全協会では、本田技研工業（株）安全運転普及本部鈴鹿普及ブロックからプログラムと指導ノウハウの提供を受け、今年1月より高齢者向けの交通安全教室に取り入れている。同協会シルバーセーフティサポーターの虫上陽子さんは「初めてプログラムを見た時に、豊富な映像や画像によって話だけでは伝えきれないことを上手く説明できると感じ、すぐに使ってみたいと思いました。運転免許を持っていない方だけでなく、経験豊富な高齢ドライバーの皆さんにも充実した中身だと好評です。また、指導内容を与えられた時間に合わせて選択して組み合わせることができる点も使いやすいと感じています」とプログラムを評価する。

歩行者とドライバーの思い込みが事故を招く

6月7日、岡山県倉敷市の神亀（しんき）学区コミュニティ協議会老人部主催の交通安全教室が開かれ、指導を担当する虫上さんはプログラムを使って集まった140名の高齢者に歩行中の事故防止のポイントを解説した。

まず、高齢者の交通死亡事故の特徴について、クイズ形式で虫上さんが受講者に尋ねながら、道路横断中に左側から来るクルマとの接触が特徴であることを説明。さらに、そのような事故がなぜ多いのか、事故を再現したアニメーションを見せながら問いかけた。受講者からは「安全確認が不十分だった」「クルマは来ないものと思い込んでいた」という声が上がる。

これをふまえ、歩行者とドライバーはお互いがどう見えているのか、それぞれの目線からの事故にいたる再現映像を見てもらう。歩行者は自分の右側から通過したクルマで左側から接近するクルマが見えなくなり、ドライバーはすれ違う対向車によって右側から横断しようとする歩行者が見えなくなる。虫上さんは歩行者とドライバーがお互いに死角に入ることで、双方が「いないはず」と、自分本位な思い込みや間違った判断をすることが、事故の原因として考えられると補足した。

クイズ形式で高齢者の死亡事故の特徴を導き出す

横断後半に左側から来るクルマとぶつかる事故をアニメーションで示し、その原因を高齢者に考えてもらう

クルマは自分が思っている以上に早く近づいてくる

続いて、高齢者の代表1名が道路横断シミュレーションを体験。クルマとの距離感はつかみにくく、自分が思っている以上に早く近づいてくることを受講者に気づいてもらうことがねらいである。代表者はスクリーンの左端に立ち、虫上さんの合図で足踏みする。それと同時に、スクリーンに片側1車線の道路の左からクルマが接近する映像を再生。足踏みを始めて8秒後にスクリーンの奥から手前向かってくるクルマとぶつかりそうになってしまった。虫上さんが合図を出した時、映像のクルマは約133m先にいて60km／hの速度で向かってくる設定で、8秒後には歩行者のところに到達することになる。75歳以上の平均歩行速度を1m／秒とすると、10mある片側1車線の道路を渡りきるのに10秒かかることになり、道路の中央を過ぎたあたりでぶつかってしまうのだ。虫上さんは、安全に渡るためには「クルマが通り過ぎてもすぐに渡らず、クルマが近づいていないか確認する」「クルマが遠くに見えても横断せずに通り過ぎるまで待つ」「渡れると思って横断を始めてもセンターラインの手前でクルマが近づいていないか、もう一度確認する」ことを強調した。

意識と行動のミスマッチに気づいてもらうための道路横断シミュレーション

歩行者とドライバーそれぞれの目線の映像で事故の過程を再現

夜間はドライバーが歩行者を発見しにくい

この後は「視野編」と「夜間編」。「視野編」では加齢に伴って視野が狭くなっているので、目だけを動かすのではなく、からだ全体を左右に振って自分のへそを確認する方向に向けるよう虫上さんがアドバイスした。また、「夜間編」では夜、単路を走行するクルマのドライブレコーダーが記録した映像を流し、途中で道路を横断する歩行者を見つけてもらう。それを認識できた受講者はわずか1名だった。こうした映像を使って、夜間はドライバーが道路を横断する歩行者を発見しにくいことを実感してもらう。そして、虫上さんは倉敷市水島支所の交通指導員と一緒にオリジナルの寸劇を織り交ぜながら、反射材着用の効果を受講者に伝えた。

オリジナルの寸劇で反射材着用の効果を説明

最後に、「今から守ってほしいこと」として、

①クルマが通り過ぎてもすぐに渡らない
②センターライン手前でもう一度確認
③からだ全体（目とへそ）で安全確認
④反射材を着用しましょう

をスクリーンに映し出す。この4項目を受講者全員で唱和して、約1時間にわたる交通安全教室は終了した。

受講した70代の女性は「歩行者とドライバーの目線から事故を振り返る映像はわかりやすく、注意すべき点が理解できました。視野が狭くなっていると感じるので、からだ全体で確認することを心がけたい」と感想を語った。

水島交通安全協会では高齢者を対象にした交通安全教室を年間約60回開催している。「今後もホンダのプログラムを拡げていきたい」と虫上さんはいう。

「視野編」では近くのクルマだけに注目してしまうと後続車を見落とす危険があることに気づいてもらう